

〔曲名〕 Les Amours d'un Grillon et d'une Grillonne

組曲「蟋蟀（こおろぎ）の恋」

1.Rencontre 2.Serenade 3.Declaration 4.Gavotte de Noces

出会い セレナーデ 愛の告白 結婚のガヴォット

〔曲種〕 Suite

〔作曲者〕 Nino Alassio

ニーノ アラッシオ

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

〈はじめに〉

1984年（昭和59年）10月14日、名古屋で開かれた日本マンドリン連盟主催の第9回マンドリン独奏コンクールに第一位入賞した京都の石村隆行君は、

当時同志社大学に在学中で、マンドリンクラブの指揮者でもありました。

同君は引き続きマンドリンを学ぶために渡伊、研鑽（けんさん）を積むこと既に数年、斯楽の蘊蓄（うんちく）極めつつありますが、

私は未知の資料（楽譜文献類）の入手を事細かに懇請、その殆どが叶えられています。

最近は全く未知の作品（絶版楽譜、未出版の作者自筆譜）を発見、その数々のコピーを送られて、改めて我々の知識が、氷山の一角であることを思い知らされました。

年に二、三度は必ず送られてきましたが、今年五月送られた中に本曲「蟋蟀の恋」がありました。

作者 Nino Alassio は本邦では全く馴染まれておりませんが、その父 Serafino と共に多くのマンドリンの作品があり、息子Ninoのものでは、

わずかに「田園にて」組曲の中の第4楽章「アヴェ・マリア」だけを知っておりました。

さして注意を払ってなかったのですが、このピアノ伴奏のマンドリン独奏曲の譜を眺めて、作者の意図にすっかり虜になって了い、

何が何でも合奏にしてみたい意欲が抑え切れず、コンサート前後の慌ただしい中に、無我夢中で編曲浄書したものです。

〈作者について〉

作者 Nino Alassio は1872年4月13日、ジェノヴァに生まれ、父 Serafino からピアノを、そして、かの華麗なマンドリン曲「月と恋」を書いた Nicolo Massa (1854~1894) から作曲を学び、力作は数種の歌劇のようですが、多くのマンドリン曲を手がけ、父 Serafino と共作のものも数あります。ジェノヴァではピアノと作曲を教え、市のパガニーニ音楽院ではソルフエーজেと作曲理論の教授でもありました。

マンドリン曲では組曲「田園にて」(1. 黎明、2. 牧人の唄、3. 昼さがり、4. アヴェ・マリア)と本組曲「蟋蟀の恋」(1. 出会い、2. セレナータ、3. 愛の告白、4. 結婚のガヴォット)が代表的なものゝようで、いずれもマンドリンとピアノの形でかかれています。

〈マンドリンと蟋蟀〉

野口雨情の童謡にも

ころころ ころころ こおろぎが

ころころ ころころ ないている

というのがあります。

昔の文部省唱歌にもあるとおり、秋鳴く虫で松虫はチンチロリン、鈴虫はリーンリーン、轡虫はガチャガチャと、相場は決まっていますが、こおろぎは初秋から鳴きはじめ、霜の降りるころなお鳴いており、秋も闌(た)けてくると昼間から鳴いています。

まことに秋を奏でるのは蟋蟀と云ってよいと思います。

一方筆者が若い頃、夢中になってマンドリンを弾いていると、あれはいつ行ってもチリチリやっていると云われましたが、

思うにマンドリンのトレモロはチリチリと聴こえるらしいのです。

虫の鳴く音にしても楽器の出す音にしても文字で表すのは無理で、受け取り方で千差万別になります。

ひき方もヴァイオリンは弾くというのに相応（ふさわ）しく、マンドリンやギターのような撥く楽器は奏でると云いたいのです。

而（しか）もその姿勢は他の楽器と異なって、楽器をかき抱くような愛着の形で奏でられるところに、独特の趣があるではありませんか。

蟋蟀の鳴き方には三種類あると云われています。

第1. さえずりの声、コロコロコロリリリリ、玉をころがすような美しい声で鳴く、メスを呼ぶだけでなく、自分のなわばりを知らせる。

第2. 誘惑の声で、さえずりより弱く、やさしい節廻しも後の方をリーと長く引っぱる。

第3. 威嚇の声、争いの時に発する激しい鳴き方。

音は同じでも、長く伸ばすとか、切れ切れにするとか、ビブラートを入れるとか、色々と節廻しがあります。

虫の声という云い方も鳴くという字は口+鳥で人間の声、鳥の声、蛙の声、凡て口で発声するのですから、これらは所謂声楽家です。

蟋蟀たちは羽ばたく翅と翅とをする合わせて出す音ですから、器楽家に属するわけです。

そして凡ての器楽家たちはオスで、メスの方は発音器が未熟で音を発しないのだそうです。

古来、虫を題材にした曲は非常に多く、特にマンドリン曲では蝶や蜻蛉は圧倒的ですが、海外の出版目録には Papillon , Farfalla , Libellule の文字が非常に目に付きます。

カラーチェにもご存じの作品18番「花園の蝶」があり、曾（か）ってフィレンツェのマルゲリータ皇后マンドリン合奏団の指揮者でもあり、

ムニエルも一目置いていたリカルド・マティーニにも、金蠅、蝶、蜂、蜻蛉を組み合わせた小舞曲集（マンドリン合奏曲）があります。

故武井守成作品にも「虫の踊り」（Op.80）、「蚤」（Op.92）、「水に落ちた蝶」（Op.105）があり、筆者にも「残れる蚊」、「踊る子子（ぼうふら）」、歌曲に到っては蝸（ひぐらし）、蝉、蛍等何でもあります。

以上のことを本曲の作者が観察した上での作品か否かは知ることはできませんが、強弱、緩急、その他に作者の意図するものが窺（うかが）われる箇所が、アチコチに見られますので、演奏に先立って充分配慮されたいと思います。

《第一楽章》〈出会い〉では蟋蟀が美しい声で無心に鳴いていると、突然メスコオロギに遭遇して鳴き方の変わる情景が出ます。

在来のマンドリン曲作家の常套手段である和音の進行にそれほど出ない七の和音も連続が多いので、ギターパートは特にその点に注意を払い、スムーズな進行ができなければ、その部分は上向音符と下向音符を分割して演奏して頂きたいのです。

《第二楽章》〈セレナード〉はセレナード本来の形を蟋蟀に見立てたもので、専（もっぱ）らメスコオロギの歓心を買うための誘惑のさえずりとみてよいのではないのでしょうか。

《第三楽章》〈愛の告白〉の原曲は変ホ長調で、突然に前楽章からこの調に変わるところに作者の意図があるのが判りますが、

その儘（まま）の調子で編曲してみますと、各楽器とも如何にも演奏が至難となり、そのため十分な表現ができないことが明白で、急遽（きょ）、二長調に再編曲し直しました。

《第四楽章》〈結婚のガヴォット〉は文字どおりハッピー エンドであります。

1993年 7月 発行

マンドリン合奏曲集 7 集（JMU版 パート譜付）より